

# 近世の最上川舟運と地域間交流

The Mogami-Transport in Tokugawa Period and Exchange between Regions



よこやま あき お  
横山 昭男 \*

Akio Yokoyama

## 1. はじめに

川は太古の昔から、流域に住む人々に限りない恩恵を与えてきた。古代の最上川には、いくつかの「水駅」も置かれたが、それは主に官人のためのものであった。定期的に物資を運び、人々が往来する道として利用されるのは江戸期以後のことである。

江戸期の河川水運の画期的な発展は、江戸参勤のための街道整備とともに、年貢米の輸送路を確保することが最大の契機となっている。それは大河の多い東北の場合に著しいが、全国の中心（江戸・大阪・京都）から遠いこともあった。しかし河川の開発や発達の仕事は様ではなく、流域の政治的な支配や特産物の発達事情によっても特色がみられる。

北上川や雄物川の流域の場合は、ほとんど一つの大藩が上流から下流まで支配したが、最上川の場合は、幕領のほか諸藩分領があり、またその変化が激しかった。河口の港酒田が「諸国往還之津」としてにぎわったのもその反映とみることができる。また上・中流の特産物として発展した紅花・青苧は、多くの商人輩出の基盤であったが、これらの主たる輸送路は一貫して最上川であった。これらの商人を通じて上方商品の移入も活発になったことは当然である。このような条件の中で、さらに最上川流域における地域間の関係はどうであ

ったのか、舟運の拠点であった河岸および河岸商人を中心にとりあげ、文化の交流についてもふれることとしたい。

## 2. 河岸の起こりとその盛衰

最上川には江戸期を通じて、最も重要な河岸として三河岸があった。これは舟運が最も発達した中流部に属し、江戸中期以後、流域経済の発達にともなう新しい河岸の増設によって盛衰もあったが、江戸期の河岸の中心を担っていたところである。

それは下流から、新庄盆地の清水、山形盆地の大石田・船町であるが、これらの河岸が成立したのは、17世紀のはじめであった。慶長6年（1601）は、山形城主最上義光が、関ヶ原戦の功績で57万石の大名となり、最上川は中流から河口酒田までその支配領域となった。義光が領域支配の一環として最上川水運の開発を進めたことは、中流部の三難所（碁点・三河瀬・早房）の開削や酒田港の整備を行ったことで知られている。三河岸の「町立て」に関する当時の文書はないが、後世の記録に船町村の起こりは慶長年間とされ、大石田や清水の家並みや屋敷割をみると、この時期の計画的なものであることも知られる。それ以前に船着場として利用されていたとしても、慶長年間に画期的な整備が行われたのである。

河岸は、大名などが年貢米を廻米と称して、大坂や江戸へ輸送するための船積場であるとともに、民間荷物を取り扱う河岸商人の活動も許されたところである。これを正式の河岸とすれば、こ

\*山形大学名誉教授

An honorary professor of Yamagata University



写真 最上川三難所附近（村山市）

のほかに最上川には廻米だけに利用される船積場があった。この船積場は村山地方に幕領が増大するとともに多くなり、江戸中期には19か所余を数える。この頃、村山地方の幕領は15万石から20万石を上下し、山形藩・上山藩などの諸領地の中で最も大きく、それは幕末まで変わらなかった。幕領の廻米を域米とよんだが、最上川を下る幕領の域米は、正徳5年（1715）には23万俵余にのぼり、その他山形・上山・米沢など各藩の廻米は、一部商人米を含めても10万俵余であった。

廻米船着場は領主の廻米のときだけ利用されたところで、荷蔵も河岸商人も存在しなかった。廻米の船積のときだけ一時保管所が臨時に設けられ、酒田には寛文12年（1672）、河村瑞賢が西廻航路の整備とともにつくられた幕府の「御米置場」（瑞賢蔵ともよぶ）があったのである。

17世紀末の元禄時代になると、川船を利用する物資輸送が急速に発展した。それは川船数の増加や河岸商人の発展にもあらわれたが、詳しくはのちの河岸の発達項でふれることにする。ここではその前に、最上川の河岸の増設とその背景、また舟運の特色についてみておこう。

第一は最上川上流の舟運の発達である。最上川の上流は米沢盆地（置賜地方）を流れて当時松川とよばれ、ほぼ米沢藩領にあった。米沢藩は以前、伊達・信夫郡（現 福島県）を含む30万石を領し、廻米なども主として阿武隈川を利用していたが、

寛文4年（1664）の削封後は、領地も置賜地方に限られることになった。米沢藩の最上川利用への転換は、西廻航路の発達とともに以上の事情があったのである。

元禄7年（1794）、米沢藩は京都の御用商人西村久左衛門の建策を入れて、川船の通航ができなかった五百川狭谷、とくに黒滝を開削し、それまで最上川舟運の上限とされた左沢に「米沢舟屋敷」を設け、中流部とつなぐことに成功した。上流の松川にも、正部（白鷹町）、宮（長井市）、糠野目（高島町）にも舟屋敷がつくられている。舟屋敷には、米・塩などの荷蔵が置かれたが、川船は酒田から左沢までは艀船でのぼり、左沢から上流は小船が使われた。宝暦年間に阿武隈川のこづつね小鵜飼船が導入され、以後それが松川の川船の主流となっている。

江戸時代初期の最上川舟運の発展は、元禄時代の酒田港や大石田河岸の発達に象徴されるところがあった。最上川をのぼる場合、大石田は尾花沢盆地にあるが、流域最大の山形盆地の玄関口にもあたっている。すぐ上流に三難所があることもあって、ここで荷揚げ、荷積みするものも多かった。米などはその上流から船積みを行ったが、山形や谷地周辺の紅花は羽州街道を陸送して大石田から船積みすることが慣行化し、これは幕末まで変わらなかった。大石田に河岸商人が発達したのは産業の発達による地域条件よりも、河岸の立地条件

が大きかったのである。とくに元禄時代はこの条件効果が大きく、俳人松尾芭蕉が「奥の細道」で奥羽を行脚した元禄2年(1689)ころは、大石田河岸の一つの繁栄期であった。

第二には、18世紀の享保年間になると、最上川舟運を独占的に支配する大石田河岸に反発する商人が台頭してきたことである。それは山形盆地の中央部にあたる天童・寒河江地方の村々および商人たちで、特産物商品の川下げや上方商品の取引が多くなるとともに、最上川輸送による利害関係が大きくなってきたためである。大石田の河岸独占の弊害を訴えた漆山村片桐善左衛門ら5人は、大石田河岸の廃止のうえ、横山・寺津・本楯を新たに河岸として認めること、これまで、酒田船と最上船(大部分は大石田船)が「片運送」といって、民間荷物を輸送する場合は、上りは酒田船、下りは最上船に限っていたが、これを上り下りとも自由に荷積みする「入会運送」とすることなどを幕府に要求したのである。

上郷村々および商人たちの要求は、享保8年(1723)に認められ、これまでの三河岸は大石田を除き、五河岸に増加した。その後大石田は一時衰微し、18世紀半ばころから再び河岸としての発展を続けているが、寛政4年(1792)の幕府川船役所の設置により、川船運送秩序の建直しとともに、新しい発展の条件がつけられたのである。

最上川の川船は、その船籍からみて酒田船と最上船に分けられるが、その所有と構造は、町船を主とし、艀船であった。江戸中期以後、大名の手船(構造は艀船)が米沢藩・新庄藩および佐倉藩分領にみられるが、それは一定の制限のもとで認められたもので、主体は民間所有の町船である。北上川・阿武隈川の川船が仙台藩の御穀艀(大名手船)が中心となっている舟運機構とは種々の面で異なる。最上川の川船が町船を主流とした背景には、幕藩社会の成り立ちから幕領が占める流域の存在が大きかったことによるといえよう。

### 3. 河岸商人と地域間の交易

川による物資輸送が盛んになると、河岸は荷宿や河岸商人で栄えた。幕府の域米輸送の方法は、寛文期の西廻航路の整備にはじまるが、幕末まで

維持されたといつてよい。村々ではそれぞれ定められた廻米船積場から公認の艀船に積んで酒田まで下し、酒田では廻船問屋が差し向けた海船が入津するまで、瑞賢蔵に保管された。廻米を積んだ川船には、船頭・水主のほかに、積米の監視のために「上乘」(村の代表・農民)が乗船し、また村々を代表して、廻米輸送の期間は、順番で村名主が酒田に「出役」として出張するという体制がとられていた。

最上川を下る物資輸送の大部分は、増水期の春から夏にかけて行われるが、それには順序があり、まず幕府の域米、次は各藩の蔵米を運送し、それが済めば民間のいわゆる商人荷物が運ばれた。幕府と藩の廻米輸送には、酒田船・最上船(ともに町船)が共にあたることになっていたが、それが不足がちになった江戸中期以降になると、大名手船が導入されたのである。

町船の輸送回数は、普通5～6回で、往復の日数は、左沢・寺津から酒田までが約21日、大石田

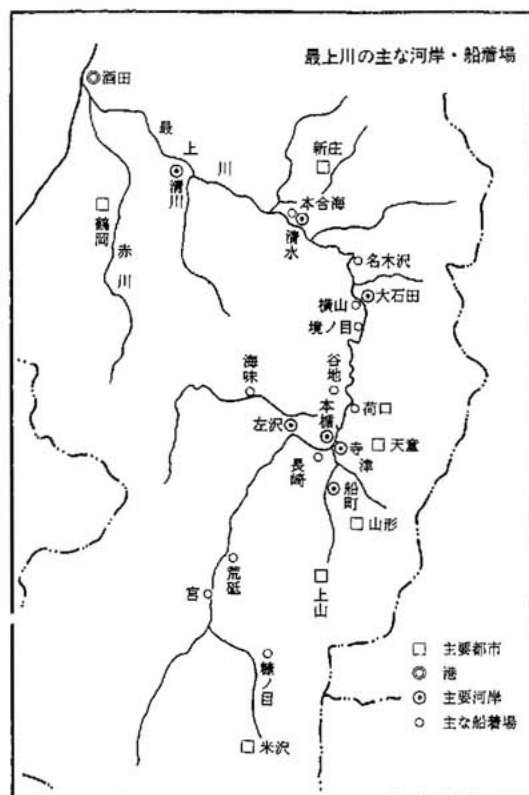


図-1 最上川的主要な河岸・船着場

からは約14日であった。

町船にとっては、蔵物としての廻米輸送のあと、いかに多くの商人荷物を積むかが経営上の大きな問題であった。最上の特産物商品の川下げは最上船、上方商品などの上り荷物は酒田船が積むという「片運送」が慣行として維持された。一時自由化を図ったときもあるが、やがて元に戻っている。

最上川には町船を所有し、商人荷物を取り扱う荷宿および河岸商人が発達した。それは最上川河口の港町酒田にとくに多いが、各河岸にもみられた。しかしその在り方が地域的条件によって同一ではなかった。それは直接の経済的基盤だけでなく、領域支配や城下町商人との関係によっても異なる場所があったのである。そこでいくつかの河岸の発達の様相とその背景について次にみることにしよう。

清水河岸は、戦国期から舟着場の要地として発達したが、江戸期には元和9年(1623)以降、新庄藩がこの地方(最上郡)を一貫して領有したことから、新庄藩の統制が強かった。この地域の河岸の利用は、古く合海もあったが、これを清水に統合し、清水河岸はその成立期から、地侍の系譜をもつ本陣問屋小屋十右衛門家が中心であった。山々に囲まれた新庄藩が蔵米輸送はもちろん、他地域との経済および文化的交流の最も大きなルートが最上川であったから、清水は唯一の外港であったのである。また清水は、出羽丘陵を横断する最上川の出入口として、庄内藩などの参勤交代の道、出羽三山の参詣の道としてもにぎわった。

しかし河岸商人が競って発展する状況はみられない。清水には江戸中期に新庄藩の手船が30艘余もみられた。また米沢藩手船の預かりも知られるが、清水河岸に所属する町船はほとんどみられないのである。上方物資が新庄城下町商人に入る場合も、清水は荷物の揚げ卸しのため経由するのみで、上方および酒田港商人との取引はほとんど城下町商人との間で行われていた。清水河岸の江戸後期の屋敷絵図をみても、本陣小屋家の屋敷が格別の広さを占め、他はすべて3畝歩余で、屋敷割の当初から余り変化がみられないのも、河岸商人の発達や交替が少なかったことを示している。

内陸部の中心である村山地方は最上川の中流にあたるが、江戸期には大石田周辺を下郷とよび、寺津・本楯両河岸の流域を上郷とするよび方があった。大石田河岸の発達は、元禄期の大石田船が約300艘余(船隻250隻積を基準として)で、酒田船に匹敵していたことから知られる。大石田の川船の数は、この頃が最高であるが、大石田には船持・荷宿だけでなく、荷主商人として活躍するものも多かった。この時代の大石田商人については、史料の制約からほとんど不明であるが、隣接する尾花沢の豪商鈴木八右衛門の史料から類推できる点が多い。鈴木は俗にこの時代の「紅花大尽」といわれ、芭蕉の「奥の細道」には俳号清風で登場する人物である。

河岸としての大石田は一時衰退したが、18世紀後期になって再び盛り返した。寛政年間の川船役所の設置による最上川舟運統制の再編もあるが、

その背景には、18世紀後期にはじまり、文化・文政年間を画期とする流域農村の商品流通の展開があった。それは特産物紅花を中心とする諸産物のほか、最上川の上り荷物である木綿・くりわた・古手などの移入品も同様である。文化11年(1814)、大石田河岸では荷宿18人が仲間を結成しているが、天保年間に荷宿として活躍するものは大小32人を数えることができる。これらの中には単に荷宿業を営む小規模なものもいたが、荷主商人として活動するものも多かったのである。その中には、中期から後期にかけて発展を続ける二藤部兵右衛門家のような河岸商人もいたが、多くは盛衰をくりかえしているのである。

上郷には船着場が集中していたが、その中で本河岸の船町・赤津・本楯が発達し、幕末には幸生銅山の廻鋼の船着場として長崎もにぎわった。とくに船町は山形城下町の外港であるばかりでなく、上山・山辺などの町場とのつながりも大きく、元禄期には草刈孫四郎など5人の問屋商人が活躍していた。江戸後期には阿部孫市など3問屋が中心となっている。城下町山形は、山形藩の中心であるばかりでなく、村山地方(山形盆地)最大の市場で、山形商人にとっての物資の移出入は「酒田一方口」ともいわれていた。山越えの陸の道は四方にあるが、移入物資の大部分は酒田を経由して出入りするという意味である。

山形商人の有力者は、近江出身のものが多いが、とくに江戸後期になると、郡内の特産物である紅花などを一手に集荷し、上方商品として、大量の木綿・くりわた・小間物・塩などを仕入れる問屋商人が発展している。佐藤利兵衛・長谷川吉郎次・三浦権四郎などの幕末期山形藩の御用商人である五人衆さらに準五人衆といわれた上層商人たちはその中心部にあったのである。

最上川舟運が江戸初期に本格的に発達した契機は、幕領や諸藩の廻米によるものであった。やがて地域の特産物の発達とともに商人荷物の輸送が多くなり、上り荷として木綿・くりわた・塩・茶・小間物などの上方商品が、庶民の日常生活必需品として移入されるようになる。江戸期から明治前期の最上川舟運の役割は、遠隔地間の交易が中心であった。これは河川舟運一般に共通することであるが、とくに最上川の場合、流域の特産物

としては、紅花と青苧が大きく、紅花の市場はほぼ一貫して京都であり、青苧も奈良市場(奈良晒の原料)が中心であったことも大きな背景の一つとみられる。

一方流域内における河岸を通じての地域間の交易も、とくに江戸後期になると盛んであった。それは公的な場でなく、多くは商人間の取引に表れる。例えば大石田の二藤部家は安永年間に、紅花商人として谷地や長崎に仲買人を置いたことが知られる。大石田周辺だけでなく、最上川上流の他の河岸商人との関係を結んでいたのである。また幕末に建立した長崎の八坂神社の手洗い鉢の寄進者12人の中には、長井の小出商人8人をはじめ、大石田・谷地など最上川筋の商人たちが多い。内陸と庄内の鶴岡や松山の間でも、最上川を酒田まで下らず、庄内の入口の清川で荷揚げする例も幕末には多くなっている。

最上川本流を酒田まで就航できる川船は、公認の船船だけであった。船船以外に内陸には小鵜飼船があり、庄内では無玉船(無棚船)とよぶ小形の船があったが、それらは支流に限られていた。しかし江戸後期になると、小鵜飼船で本流の局地間を運ぶ例も次第に増えているのは、新たに地域間の結びつきを深める動きが盛んになっていることを示すものであった。

最上川の上・中・下流にみられたいくつかの伝統的、あるいは閉鎖的な地域社会が、舟運を通じての交流の深まりによって、新たな一つの流域社会を生みだしていたのである。

#### 4. 文化の伝播と交流

最上川は物資交易の大動脈であるだけでなく、文化の伝播・交流の道でもあった。それは仏教文化・文芸・建築技術および食文化など多様な面にわたることが知られる。

仏教文化では江戸初期の舟運の発展期に、京都・大坂から多くの梵鐘や仏像が運ばれている。梵鐘の中でも中世・戦国期の羽黒山の大梵鐘や東根普光寺の鐘は、越後の鑄物師が作ったものであるが、江戸期の寛永年間から元禄年間に流域の諸寺院が新調した梵鐘は、上方伝来の鑄造品が多い。元禄4年(1691)、大久保河岸から修羅(陸上の

運搬用具)で運ばれた葉山大円院の鐘もその一つであった。しかしこれらの鐘は、第二次大戦中の供出で残るものはほとんどないが、形見として残した記録から铸造者等を知ることができる。仏像では、近江商人で大石田に定着する戸田家<sup>とだ</sup>がもたらした乗船寺<sup>せんじゆかんのりふりやうどう</sup>の千手観音立像や涅槃釈迦像<sup>ねはんしやくかどう</sup>がとくに知られるが、これらの例は個人的なものも含めれば数えきれないほどであろう。

しかし梵鐘は、享保年間以後になると、山形銅町で铸造したものが圧倒的に多くなる。山形鋳物の鋳造技術も次第に認められ、それは秋田方面など他地域にも普及するようになるのである。

芸術文化の一つとして、元禄時代に開花する俳諧がこの地方でも盛んであった。元禄2年(1689)は松尾芭蕉のいわゆる「奥の細道」の旅で知られるが、旅筋の俳人との交わりは、その土地の文芸の広がり<sup>ひろがり</sup>を示しているともいえよう。尾花沢では豪商で俳人である鈴木清風の歓待をうけて10日間も滞在し、大石田では尾花沢と大石田の地元俳人たちとともに残した「さみだれ歌仙」が有名である。

鈴木清風はその頃商人として京都と往来するだけでなく、残月軒清風の名で3冊の俳書を編集し、京都の版元から出版している。その一つが『稲菰』(貞享2年刊)である。上下2巻の俳句の数は、独吟を除き780句に上る。注目すべきことは作者の居住地の広がりである。それは江戸・京都・九州など全国にわたるが、東北では最上川流域の城下町および郷町が多い。とくに酒田・山形のほか、大石田・谷地・左沢が目立つ。しかし上流の置賜地方にはみえない。元禄期を境に、最上川舟運による上流の置賜地方と中流部との関係が大きく変わることについては前述したが、それ以前の俳諧の流派の系統、つながりを反映しているともいえよう。

江戸中期以後も庶民文芸としての俳諧活動は、村山地方に盛んであった。18世紀末ごろになると、大石田・尾花沢、また船町などにそれぞれ結社(連中)ができ、地元俳人たちの句集が編集・出版されている。とくに川筋の文芸の伝統と交流の深さを物語るともいえよう。

大正・昭和前期の哲学者阿部次郎は、庄内松山

の生まれであるが、明治30年(1897)代に山形中学(旧制)に在学し、毎年夏休みには祖母のいる松山に帰った。そのころまだ奥羽本線が開通していないので、山形から大石田または本合海<sup>もとあいのうみ</sup>までは徒歩か人力車によるしかなかった。そこから清川までは船に乗ったが、西風(鳥海風)があるときは、下りでも船中で1~2泊するのが普通であったという。これはのちに書かれた随想「最上河」(大正9年)によるものであるが、かれはこの中で二つの重要なことをのべている。一つはこの体験が、のちの自分の自然観の基礎になっていること、また美しい自然が、人間の豊かな心や人格形成にいかにか大切かということであった。

二つには、最上川は物資交易の道であるとともに、人と人、また言語および文化交流の道であるということである。具体的には庄内と内陸の言語の交流について述べ、芭蕉の俳句の奥にある文化は、それぞれの言葉や風土性ととともに理解することが大事であることを、実感<sup>じつかん</sup>をこめて説いているのである。

阿部次郎が説いたこれらのことは、その原点において現代にも通ずるものが多いともいえよう。